

だしさに変わりはありません。広尾から、やはり乗るのがやっという短編成の急行列車『大平原』で帯広へ。帯広では 2 軒の商人宿に分宿したものです。片方の宿は、女将は好人物でしたが、廊下床面の走向・傾斜を測ることができました。

登別・日和山：登別では温泉街の宿から数 km の山道を歩いて、大湯沼という爆裂火口の火口壁をなしている日和山を見学します。ある年は台風の直撃を受けました。とにかく麓まで行って様子を見よう、と出かけました。風雨いよいよ烈しく、雲の動きの変化から丁度台風の中心にいると判断し、中止するつもりで「どうする？ やめとこか」と学生に問いかけたところ、元気い奴が応えて「ここまで来たんだ、登りましょう」。かなり急な崖道ですが頂上までは吹き飛ばされても大して危険はありません。火山など私の担当ではないのですが、field geologist を自任する私が、巨漢の大久保・鞠子両先生を先に立てるわけにはいきません。意を決して足を踏み出した瞬間、学生を叱咤激励する鞠子先生の大音声か背を押しました。「見ろ！ ヒョロヒョロの坂先生でもあの通り大丈夫だ。続けー。」這い登るような状態でたどり着いた頂上では、横殴りの風で軽石がヘルメットをバチバチと叩き、眼も開けておれません。馬の背のような痩せ尾根の片側は断崖絶壁で立ち上がるのも危険です。結局、何も見ず何の説明もなしで下山しました。ずぶ濡れとなって戻った宿で、亭主が一言「町史に残るようなことをやってくれたネ」。

層雲峡・大函：帯広からのバスが峠を越えて石狩川を望む地点まで来たとき、上空が真っ黒な雷雲に覆われていることに気づきました。果たせるかな、大函に着いた途端に激しい雷雨に見舞われました。知る人ぞ知る‘雷嫌い’の私も職務だからと、決死の覚悟で露頭に赴きましたが、心ここにあらずの状態でした。その私に堤先生がさりげなく、本当にさりげなく「坂君、この状況じゃ後の予定を変更しなくては。バスに戻ってゆっくり計画を立てておいてくれ」と声をかけて下さいました。大の男が雷に怯えておれば、からかいの言葉の 1 つも投げかけたくなるどころ、堤先生の心の温かさを本当にありがたく受けとめました。

層雲峡・小函：前年に大きな崩落事故があり、層雲峡の目玉ともいえる小函は立ち入り禁止。『港町十三番地』ではないけれど、20 m 先の角を左に曲がれば全容を一望できるという所に頑丈で高い鉄柵があって頑固そうな警備員が頑張っています。その角まで行きさえすれば 30 分も歩いて来た甲斐があると、警備員氏に「我々はプロだ」と大見得を切り、談判の末やっとう許可されました。ところが小笠原先生が「立入禁止はあくまでも立入禁止だ」と制止します。「何を弱気な！ 行くぞ」「いや絶対に駄目です」と大喧嘩になりかけましたが、小笠原先生が皮肉とも殺し文句ともとれる名言を口にしました。「坂

先生、雷の時に中止するあの勇気を出してください」（これにはギャフン！）。

このまま‘来し方’を思い出してだらだらと続けていけば、1 冊の本となってしまいます。ここで止めましょう。私にとって『北海道巡検』は『地質調査実習』と共に早稲田における地質学教育の象徴のような存在でした。何十回参加したか定かではありませんが、毎回新たな発見が（もちろん露頭で）ありました。これこそ field geology の楽しさです。今夏、最後の引率でどのような新発見があるか楽しみに、有終の美を飾りたいと願っているところです。



登別・日和山頂上にて

教室だより

地球科学専修主任 小川 誠

いつの間にか着任 13 年目となり、長く主任を勤められた高木先生から引き継ぎ 2006 年より主任となりました。教室発足の 1964 年生まれです。よろしくお願ひいたします。

まず教室の最近の様子を紹介しましょう。非常勤扱いの助教授として 2006 年度より教室スタッフとなった Timothy J. Fagan 博士が、2007 年 4 月より准教授となりました。すでに第一期目の卒業生を輩出し、柔らかな人柄と熱心な指導で学生から人気の高い研究室を運営されています。また 2 年半にわたって助手として貢献してくれた岡田友彦博士(第 32 期)が 2006 年 10 月付けで信州大学工学部に助手(現在は助教)として移りました。長野は本人にとって故郷であり、分野の違う研究室ではありますが、新天地でますます活躍してくれるでしょう。岡田さんに替わって 2006 年 10 月付けで鉱物表面の改質と材料設計に関する研究を専門とする井出裕介博士(第 34 期、小川研修了)が助手として加わりました。3 年間の限られた任期ですが、新しい風を吹き込んでくれることを期待しています。現在、教授 7 人、准教授 1 人、助手、と卒業生でもある職員の米持さん、薄片室の岩崎さん、学生への対応など事務全般を担っている山崎さん、中村さんの体制で教育、研究にあたっています(*注 助教授や助手という役職名は今後准教授、助教などに替わっていくようです)。

さて世の中の流れに従って、本学でも改組、改称が進んでいますが、地球科学教室に直接関わる部分は一段落したようですので、簡単にまとめて紹介します。まず今年度より理工学部、大学院理工学研究科の 3 分割(創造、先進、基幹)に伴い、大学院は創造理工学研究科、地球・環境資源理工学専攻に属することとなりました。昨年からは教室に加わった大師堂教授は先進理工学研究科、物理学及応用物理学専攻に属します。全学的に学術院という組織ができ、教育・総合科学学術院の教員となった私たち 8 人のスタッフは、長く共に理学科を構成した数学専修の学科としての独立に伴い、現在は生物学専修の 7 人のスタッフとあわせて新しい理学科を構成しています。その生物学専修ではここ数年で大幅に世代交代があり、また東京女子医大との連携に絡み、新宿区河田町の東京女子医大に隣接した新キャンパスに建築中の新棟へ西早稲田キャンパスから移動する準備が進んでいます。このような改組や再配置は労多くして、メリットがでにくいものだと私は思いますが、学生にとってより学びやすく、水準の高い研究・教育の展開に有利な環境を実現すべく、この機を有効に使っていきたいと思っています。奨学金の充実など、よくなっていることもあります。構造改革は日本社会のキーワードですから卒業生の皆様も多様な変化を経験されていることと思います。オープンキャンパスやホームページなどで情報を発信していますので、教室に対する忌憚のないご意見をお寄せください。会員の皆様のご健康とますますのご活躍を祈念します。

最後になりましたが、あらゆる面で長らく教室の中心であった坂先生の後任のことを考えなければならぬ時期がやってきてしまったことを報告しなければなりません。時の流れの速さに戸惑いを覚えますが、長年の熱心、丁寧なご指導を思いだし、先生を気持ちよく送り出したいと思っています。

研究室だより

坂研究室

阿部 賢二 (第 41 期)

今年度の坂研究室は PD1 名、修士課程 6 名、学部生 3 名の計 10 名です。メンバーみんな個性があり非常に賑やかで楽しい研究室です。教授、先輩ともにコミュニケーションが取りやすく研究内容についてもとても快く相談にのってくれます。

今年の研究テーマは、三重県で「四万十帯」, 「秩父帯北帯・黒瀬川帯の境界」, 「松尾層群の堆積環境の解析」について、関東で「山中地溝帯」, 「名栗断層」について行っています。それぞれのテーマの中で地質調査を行い、堆積構造、緑色岩岩石学、砂岩組成、放散虫年代などの細かなテーマに沿って各々研究しています。

坂先生、PD の加藤さん、助手の太田さんの指導の下、一致団結して研究活動を行っています。卒論生も先輩に助けをもらいながらフィールド調査やデータ処理をがんばっています。

OB/OG の皆様には、お暇なときや大学の近くにお越しの際はぜひ研究室に立ち寄っていただき、アドバイスなどをしていただければと思います。また研究室は他研究室の人もよく来てアットホームな雰囲気なので、1~3 年生も気軽に研究室に立ち寄ってください。

平野研究室

早川 達也 (第 41 期)

今年の平野研究室は博士後期課程 4 名、修士課程 5 名 (1 名今秋期卒業)、卒論生 5 名の計 14 名で日々研究をしています。アンモナイトやその他の化石が置いてある棚の向かいにある部屋が、私たちの主戦場です。平野弘道先生の強力なリーダーシップのもと、私たちは地球環境変動や生物の変遷に関する研究を行っています。研究になくてはならないのがさまざまな化石です。アンモナイトを始めとした軟体動物化石ばかりではなく、脊椎動物、はたまた微化石(花粉・孢子、渦鞭毛藻、放散虫)も大切な研究試料です。また、最近では有機物質中の炭素同位体比を測定するという化学的な手法もとられるようになりました。さて、地質学を行ううえで欠かすことのできないものがあるとするれば、それはフィールド調査でしょう。平野研のフィールドは、日本はもとよりアジア大陸にも及び、現在もその範囲は拡大する一方です。私たちは夏になればフィールドに飛び立ち、ハンマーを片手に地層に張り付きます。大地に触れ、地球の息吹を肌で感じながら、太古の昔と対峙する瞬間です。それは同時に、自然の大きさとヒトの小ささを、理屈を超えた理解として認識するときでもあります。自然に向き合うことでしか自然史科学のなぞを解明することはできません。東京を離れ、見知らぬ土地で過ごすことは勿論大変なことばかりですが、現地の人々の温かい励ましの言葉や、他大学の地球科学教室の学生との交流などはここでしかえられない貴重なものです。研究は一人ではできません。研究室内では日々研究に関して熱い議論が交わされ、その中から新しい考え方や見方が生まれます。このように私たちは野外においても室内においても熱い活動を展開しています。

円城寺研究室

関口 寿史（第 36 期）

ご存知の方も多いと思いますが、今年度、円城寺先生は北米に滞在中のため研究室には常に不在です。そのため今年の円城寺研究室は博士課程 2 人と修士課程 1 人の計 3 人、例年大人数を有する当研究室ですが、今年は少数人員で研究に励んでおります。学部生がおりませんので、代わって研究室の紹介をさせていただきます。

鉱床学とは、端的には金・銀・銅などの資源を掘り当てるための基礎学問であり、古は青銅器時代の隆昌に寄与し、中世には山師としての生業、最近では資源地質学と名を替えています。そしてその発展に伴い、経済的観念や争い、環境問題までも引き起こすこととなります。「基礎」学問たる所以はそこにあります。今では何かと利害が絡む分野ですが、当研究室はそこから一步引いた純粋な学問として捉えています。

当研究室での研究テーマも上記の鉱床学諸分野で多岐にわたります。学部の本分である教育学などももちろん含まれます。研究テーマの選択にあたっては、分野やフィールドなどの大枠を与えられてその中から自分のやりたいテーマを決めることとなりますが、最初から自分でテーマを決めることも可能です。この場合は自分で責任を持たないと後々大変なこととなりますが、それがこの研究室の醍醐味でもあります。研究室の雰囲気は「来る者拒まず、去る者追わず」です。何かしら興味のある方は大いに訪ねてください。

最後に。地球科学は生活の上でも何かと役に立つ学問です。また、身近な分、専門外の人にとっても何かと興味を惹かれる分野です。将来専門に進むつもりはなくとも面接などの話題作りなど、副次的な使用も可能です。是非、専門的な学問を愉しみ、さらに教育学部という大義名分の下で広い教養も身につけてください。

小笠原研究室

櫛 友英（第 41 期）

我が小笠原研の研究対象は「地球の生い立ちそのもの」と言っても過言ではありません。地球は約 46 億年の歴史の中でプレート運動により数回の地球全体の表層物質が入れ替わるほどのダイナミックな動きを続けています。様々な物質が絶えず循環する中で、我が研究室は特に炭酸塩鉱物による炭素循環に着目しています。近年、地球温暖化によって問題視されている CO₂ ですが、今までの研究により、原始大気には CO₂ が大量に含まれており、海水の誕生とともに海水に溶解込み、海洋プレートと共に地球内部への沈み込みや、有機物として地表(又は海底)に蓄積しプレート運動によって地下深部に供給され、そこで花崗岩やダイヤモンドが形成され、噴火によってまた地表に戻ってくる、というような循環システムの可能性が示唆されています。

当研究室では、プレート運動に起因する大陸衝突帯(小笠原研では特にカザフ共和国コクチェタフ変成帯)に分布する“超高压変成岩”と呼ばれるダイヤモンドやコース石を含む岩石を研究することによって、これら炭素循環プロセスの解明の一端を担っています。ダイヤモンドやコース石はきわめて高い圧力下でのみ安定ですが、岩石の源は表層物質と考えられています。つまり、地表に存在する“超高压変成岩”は地球深部の情報を保持した重要な証拠であると言えます。当研究室の目的は岩石学のアプローチにより、地球内部の物質の様子やその循環・歴史を解明することです。

人間は月にまで到達できる技術を得たにも関わらず、自分たちの生きる地球の内部には約 10 km 程しか到達できていません。当研究室は“超高压変成岩”やその他の岩石をまだ見ぬ残り約 6390 km の地球内部との窓口と捉え、我々の経験したことの無い 46 億年の歴史の謎を紐解いていく事に取り組んでゆきます。大袈裟かもしれませんが、そんなロマンが我が研究室にはあります。難しく考えずに純粋な好奇心を頼りに是非小笠原研へ！！

高木研究室

山田 哲史（第 41 期）

今年度は、PD2 名、修士 2 年 3 名、修士 1 年 2 名、学部生 3 名と、ちょうど研究室の机に収まる人数です。これまでと同様、MTL(中央構造線ですね)を軸としたテクトニクスの解明が研究室の基本のテーマです。近年メンバーが取り扱っているフィールドは、三重、淡路島、手島、長野などです。テーマについては、フィールド系よりも室内系のものが多く、現在は、それぞれが夏までに採取してきた断層岩などのサンプルから大量の薄片をつくり、観察、分析する日々を送っています。薄片室の使用頻度は専修一とのことで、使用料が研究費を圧迫しているようですが・・・7 月には、OB の島田さんを迎えて松代にてゼミ合宿を行い、岩石整理とあわせて泥火山(地表から泥やガスが噴出しています!)巡検も行いました。

夏も終わりに近づいてきました。9 月に北海道で開催される地質学会へ向けて、修士の先輩方は忙しそうにポスターを制作されています。残り半年足らずですが、卒論生もペースを上げて頑張っていきたいと思います。OB/OG の皆様、大学付近にお越しの際は、ぜひ研究室にお立ち寄りいただき、研究や就職のアドバイスを頂ければと思います。三年生以下の皆さんも、研究のことなど何でも気軽に聞きにきてください。



松代セミナーハウスにて

小川研究室

一宮智咲，佐藤恵，仁藤この美（第 41 期）

小川研究室では、天然の鉱物の性質・形成メカニズムを応用して、機能性物質を作り出すことを主な目標として日々研究を行っています。具体的な研究テーマとしては、粘土鉱物や層状複水酸化物をはじめとした層間化合物、多孔質物質などが挙げられますが、目指している応用・発展は多方面に広がります。それは、無限に広がる興味を持ち、才識に溢れた私たちの研究室のリーダー・小川誠先生のご指導があってこそ、です。

研究室内では日々、学生同士で研究についての会話が行き交っており、また、適宜行われる研究打ち合わせでは、先生と学生同士のコミュニケーションが絶えません。これらと普段の実験、ゼミ発表も併せて経験することで、人前で自分の考えを伝える力や物事への考え方が鍛えられます。進学、就職、起業…と、当研究室の学生が希望する進路は様々ですが、これは社会生活を生き抜く上で、貴重な経

験になっていると思います。

このように研究に対して厳しく、真面目な印象がある小川研究室ですが、普段の雰囲気はとても明るく笑い声が溢れ、ゼミ合宿や打ち上げの飲み会では小川先生を中心にとっても盛り上がります。特に本年度は、学部生 16 名、修士課程 13 名、計 29 名と大所帯であり、ますます研究室内は賑やかです。そんなバラエティーに富んだ小川研究室メンバーは、世のため人のため卒業のため、今日も白衣姿で 6 号館 2 階&地下の各部屋を歩き来しながら、研究にいそしんでおります。

フェイガン(Fagan)研究室

岩崎 直哉 (第 41 期)

2005 年に発足した我々の所属する同位体地球科学研究室は、現在、修士課程が 3 名、学部生が 9 名の若い研究室です。対象となるサンプルは隕石を扱っており、各サンプルの鉱物組成、化学組成、化学的偏差を調べ、サンプルがどのような形成過程や変成過程を経たのかを調査しています。現在、初期太陽系の環境を保存していると考えられている CAI、月の隕石、形成過程がまだ明らかとされていない E Chondrite などを研究テーマにしております。主な作業としては偏光顕微鏡を用いたサンプルの観察、EPMA による化学組成分析、画像解析ソフト ENVI を使用した画像解析などとなっております。

まだ日本に来日して日の浅いフェイガン先生とのコミュニケーションが我々の最大の課題です。機器の使用方法が分からないときから、研究が行き詰っているとき、方向性が定まらないときに至るまで、フェイガン先生は我々が理解するまで親身になって相談に乗ってくださいます。また研究に必要な文献や卒論、ゼミは基本的に英語が主となっています。そのため、研究はもちろんですが、筆者をはじめ英語に苦しんでいる学部生も多々います。ですが確実に英語力はつけられるはずであると信じています。

研究室は比較的自由です。発足してから間もないため博士課程の方がいません。メンバーも個性的な方々が揃っており、日々、先生とのコミュニケーションの取り方を互いに考察・情報交換しあいながら楽しく研究に取り組んでいます。

大師堂研究室

中川 翔 (第 41 期)

2006 年度に大師堂研究室にて卒業研究を行うことが可能となり、現在研究室には博士課程 2 名、修士課程 6 名、学部生 3 名の合計 11 名が在籍しています。

研究分野は電波天文学であり、“突然強い電波を出す天体”の発見に力を入れています。15 号館屋上にある 64 素子電波干渉計及び栃木県那須の早稲田大学パルサー観測所において宇宙からの電波を観測しています。

電波を観測するにあたっては数学と物理学の深い理解をベースに、コンピューター・プログラミングやエレクトロニクスその他の技術が必要となります。また、大師堂研究室では観測に必要な装置の開発を自分たちで行い、それらにトラブルがあった場合には自分たちで修理を行います。

数学好きな大師堂先生の下、いきなり難問を出されて頭を悩ませながらも研究室メンバー一同日々熱心に研究に励んでおります。

OB 便り

地表で星空を見上げて

宮脇 亮介 (第 15 期)

先日オープンキャンパスを少し覗く機会がありました。卒業してからいつの間にか 25 年以上が過ぎてしまいましたが、変わったところもあれば変わってないところもあり非常に懐かしい思いをしました。私は、学生の時から下を見るより上を見るのが好きでした。高校の教員を経て、福岡教育大学で理科教育学の教育研究を中心に 19 年間行っていましたが、この 4 月から桜美林大学で天文学と理科教育学の教育研究をしています。どのような内容かというと天文学は分子雲からの星の形成、特に太陽より数十倍重い大質量星のクラスター形成についてすばる望遠鏡や野辺山の電波望遠鏡などを使った観測的研究をしています。これらの星は太陽系のような惑星系を形成するのかなどという興味もあって、「地学(地球科学)」とは遠いような近いような研究をしています。理科教育学のほうは天文や物理の児童・生徒の認識とそれらの対処をした学習指導についてです。最近では科学コミュニケーションの問題にも手を出しています。

大学教員の仕事もこの十数年でとても忙しくなりました。最近では程度の差はあれ定員確保、履修科目の減少による学生の学力低下など、どの大学も工夫して生き抜こうとしています。その中で桜美林大学ではリベラルアーツ教育(単なる一般教養教育ではありません)を重視して、それまで文系の専攻しかなかった学部を改組して、自然科学系の専攻を新たに作り、リベラルアーツ教育を目指しています(ICU のようなところと想像していただければわかりやすいかもしれません)。専攻のしかたによっては理学系と同じゴールになりますので、その際にもリベラルアーツの考えを加味した教育指導を行うことを目標としています。スタッフ数は少ないですが、大気物理、気象、地震などを集めて特色を出そうとしています。まだ、スタートしたばかりの専攻なので今後の発展を応援してください。

フィールドワークの大切さ

安藤 生大 (第 24 期)

私は現在、千葉県銚子市にある、千葉科学大学 危機管理学部 環境安全システム学科に勤務しています。当大学は、3 年半前にできた新しい大学です。特徴は、景色が良く、自然環境に恵まれていることです。研究室からは、東洋のドーバーと呼ばれる屏風ヶ浦と太平洋が一望でき、冬の空気が澄んだ時期には遠く富士山も見ることができます(下図)。

私の研究室の隣には、地学教室 3 期卒業の坂本尚史先生がおられます。坂本先生は、関連学園である岡山理大での研究・教育経験が豊富であるため、学生指導や教育方法について悩んだ時などは、多くのアドバイスを頂ける、とても心強い存在となって頂いております。

私の担当科目は、“地学Ⅰ”と“地学実験”，それと 3 年次専門選択科目を 2 科目担当しております。特に、地学Ⅰでは銚子という地の利を生かして、体験型の地学教育を実践しております。具体的には、学生を 5~6 人のグループに分けて大学の近くにある様々な地層(愛宕山層群、銚子層群、犬吠層群など)を見学する地層見学会を行っております。このようなフィールド重視の地学教育は、早大地学教室の伝統であり、自分はその影響を強く受けていることを実感します。また、授業内容においても、いまだに坂先生の地学Ⅰや平野先生の地学Ⅱのノートやプリントを読み返しています。見直す度に、その

レベルの高さに驚くと同時に、図を多用する講義手法と分かり易い表現を手本とさせて頂いております。

毎日、心を洗う良い景色に囲まれ、心地よい波の音を聞き、新鮮な海産物に舌鼓を打つ生活を送っています。研究設備も最新のものが揃っており、学生も素直で熱心に勉強や研究に取り組み、教員とも厚い信頼関係で結びついております。

皆様も、お近くにお出かけの際には、是非この研究・教育パラダイスの千葉科学大学にお立ち寄りください。心から歓迎いたします。



研究室からの眺望

たいせつにしたいこと

岡田 友彦(第34期)

昨年10月に信州大学工学部物質工学科に赴任し、早くも一年が経とうとしています。同学部は長野市にあり、長野盆地の中心に位置しています。気候は盆地特有なもので夏は暑く冬の寒さはきわめて厳しいですが、少し足をのびし周囲を見渡せば北信五岳(戸隠・飯綱・黒姫・妙高・斑尾山)、遠くは北アルプスを一望できるまさに風光明媚な土地です。

長野市で起きた地質学的イベントとして、1985年に地附山(ぢづきやま)で地滑りが発生したことは記憶に新しいと思われ(当時この模様はテレビでも実況中継されました)。丁度私が小学生の時、近くの山が大きな音を発しながら崩れていくのを目の当たりにしたので、今でも鮮明に記憶として残っています。もともと長野盆地の北西側には新生代裾花凝灰岩層が発達しており、これが変質してモンモリロナイト化したことが地滑りの要因とされています(長野県土木部(1986)地附山地すべり災害)。私が助手在任中を含め、小川研究室でお世話になった8年余りの間、モンモリロナイトを母体とした材料設計に携わったのも、不思議な縁であったと今では感じています。

現在は、主に触媒担体の設計や含塩素ポリマーの分解無害化に従事しており、これまで経験したことのない技術も多く、日々学生さんとともに勉強しています。工学部では、実務的な研究(開発)を行うことを求められます。また、企業との共同研究を行う場合、コストパフォーマンスの高さや開発のスピードの速さまでも視野に入れねばなりません。物事を理解しそれを知識(博識や蘊蓄)としさらには体系化することに価値のあるといった学問の根幹が失われようとしていくことに、時として危機感を覚えることがあります。私が学部当時必修科目であった地質図学実習や地学巡検などで学んだ話をすると、周囲の学生さんは興味をもって耳を傾けてくれますし、信州の地学の書籍に目を通せば、故郷の地質を理解したという大学入学前では到底味わうことのできなかつた満足感に浸ることができます。

新たな技術を身につけつつ、これまで地学教室で学んだたいせつな部分を地元に還元できるよう精進してまいりたいと思います。

専門部会報告

資源専門部会報告

古野 正憲 (第 19 期)

今年の同会は、2007 年 1 月 12 日(金)、例年のごとく早稲田通りと明治通りの交差点付近にある「葉隠れ」で開催しました。1 期から 39 期までの地学 OB 及び現役が 30 名ほど集い、近況報告や最近の研究テーマの話を酒の肴にワイワイと親交を深めました。もともと同会は地学で鉱床学・岩石学をご担当されていた鞠子 正 名誉教授の誕生日を研究室に所属する学生や卒業生で祝っていたことから始まっており、「葉隠れ」のご主人からは、「先生の誕生日を 25 年以上も欠かさずやっているのは、おまえらぐらいだよ。」と、ちょっと感心(呆れ?)顔で言われつつも、現在まで皆さんのご協力により続けることができいております。現在会員は 50 名以上で 1 期～3 期の先輩は既に還暦を迎えられ、第一線を退かれています方もおられますが、いまだに現役の研究者達に対して厳しいご指摘・ご質問をなさいます。39 期は来年度新社会人となり、諸先輩方に続くべく早稲田地学魂を各業界に吹き込んでくれるものと期待しております。「集り散じて人は変れど、仰ぐは同じき理想の光・・・」

鉱物専門部会報告

林 政彦 (第 12 期)

去る 8 月 11 日(土)に開催した特別講演「日本新鉱物・新産鉱物 2007 夏」(講師：国立科学博物館地学研究部、松原聰氏)からトピックスを紹介する。

今年の夏まで、日本で発見された新鉱物は、大阪石(Osakaite: $Zn_4SO_4(OH)_6 \cdot 5H_2O$, 三斜), 宗像石(Munakataite: $Pb_2Cu_2(Se^{4+}O_3)(SO_4)(OH)_4$, 単斜), ストンチウム緑簾石(Epidote-(Sr): $CaSrAl_2Fe^{3+}(Si_2O_7)(SiO_4)O(OH)$, 単斜)の 3 種。一方、日本新産鉱物は、ナハコライト(Nahcolite: $NaHCO_3$, 単斜), バッツイ石(Bazzite: $Be_3Sc_2Si_6O_{18}$, 六方)。プライスワーク雲母(Preiswerkite: $NaMg_2Al(Al_2Si_2O_{10})(OH)_2$), メタ輝安鉱(Metastibnite: Sb_2S_3 , 非晶質)の 4 種であった。これらのなかで、石英中に含まれる 10 ミクロンサイズのナハコライトや辰砂とされていたものがメタ輝安鉱だったという話は、肉眼による同定の難しさをあらためて思い知らされた。

なお、この講演会の主催は鉱物情報(<http://www6.plala.or.jp/mineral/>)で、関心のある方は林(e-mail: mhayashi@aoni.waseda.jp)までご連絡ください。

理科教育部会活動報告

木村 純 (第 2 期：早稲田実業学校)

稲門地学会の中に理科教育部会が発足し久しくなりますが、この 2 年ほど会合が持たず、停滞状態にあります。これはひとえに私の怠慢にあります。本年度は是非開催したいと思っています。関係の方々にはおってご連絡申し上げます。理科離れはさげばれておりますし、特に地学教育が抱える問題は多々あると思います。この会が情報交換の場として活発になることを念願しています。当部会がメーリングリストを開設していることはご承知かと思えます。会員数も少しずつ増えています。参加ご希望や、ご関心をお持ちの方はご連絡ください。[連絡先：宮下 敦氏(成蹊中・高)または木村 純(早稲田実業学校: j-kimura@wasdajg.ed.jp)]

会計報告（2005～2007 年度 9 月）

加藤 進（第 15 期）

2005(平成 17)年度 稲門地学会 会計報告(9 月分以降も含む)

収入		支出	
前年度繰越金	¥1,851,103	04 年度卒業生お祝い金	¥30,000
会費(卒業时会費)	¥10,000	05 年度入学生お祝い金	¥20,000
会費(20 年会費：18 期まで)	¥150,000	堤先生最終講義案内等	¥88,449
総会残金	¥24,400	堤先生を囲む会補填	¥123,570
利子	¥8	会費振込み手数料	¥1,090
		会報印刷発送費(業者)	¥273,670
		印刷・葉書・用紙費	¥127,474
		会員データベース修正費	¥15,000
		次年度繰越金	¥1,356,258
			支出合計
			¥679,253
	¥2,035,511		¥2,035,511

2006(平成 18)年度 稲門地学会 会計報告

収入		支出	
前年度繰越金	¥1,356,258	05 年度卒業生お祝い金	¥30,000
会費(卒業时会費)	¥30,000	06 年度入学生お祝い金	¥20,000
会費(20 年会費：19 期まで)	¥190,000	会費振込み手数料	¥1,850
総会残金	¥17,200	会報印刷発送費(業者)	¥252,960
利子	¥8	印刷・葉書・用紙費	¥141,240
		会員データベース修正費	¥15,000
		雑費	¥210
		次年度繰越金	¥1,132,206
			支出合計
			¥461,260
	¥1,593,466		¥1,593,466

2007(平成 19)年度 稲門地学会 会計報告(9 月まで)

収入		支出	
前年度繰越金	¥1,132,206	06 年度卒業生お祝い金	¥30,000
会費(卒業时会費)	¥30,000	07 年度入学生お祝い金	¥20,000
会費(20 年会費：20 期まで)	¥20,000	会費振込み手数料	¥460
利子	¥54	次年度繰越金	¥1,131,800
			支出合計
			¥50,460
	¥1,182,260		¥1,182,260

2005・2006 年度 稲門地学会役員・幹事

役員

- [会 長] 坂 幸恭 (教職員)
 [副会長] 原 雄 (2 期), 林 政彦 (12 期)
 [庶 務] 米持 賢治 (教職員・15 期)
 [会 計] 加藤 進 (15 期), 戸高 法文 (12 期)
 [監 査] 平野 弘道 (教職員), 高野 良一 (1 期), 筑紫 恒男 (2 期)

幹事

- [教職員] 坂 幸恭, 米持 賢治
 [1 期] 篠田 晋治, 高田 徹夫 [2 期] 筑紫 恒男, 古川 雅彦
 [3 期] 川島 眞一 [4 期] 石田 吉明, 篠崎 貞
 [5 期] 伊藤 和男, 酒井 健, 福田 正光 [6 期] 市毛 芳克, 三宅 克行
 [7 期] 中泉 徹 [8 期] 山崎 次郎, 若林 直樹
 [9 期] 稲田 敬, 池田 則生, 村野 隆 [10 期] 大橋 信介, 塩澤勝太郎
 [11 期] 品田 進司 [12 期] 安藤 寿男, 戸高 法文, 林 政彦
 [13 期] 泉谷 泰志, 佐野 浩, 永井 保弘 [14 期] 野々口 稔, 村松 春彦
 [15 期] 加藤 進, 小池 豊, 宮下 敦 [16 期] 磯上 篤生, 宇田川義夫
 [17 期] 市川 昌則, 長谷部直人 [18 期] 田中 義洋
 [19 期] 金澤 義人, 古野 正憲 [20 期] 嘉戸 章江, 瀬谷 正巳, 西堀 一彦
 [21 期] 風間 武彦, 加藤 潔, 森岡 右伍 [22 期] 大森 聡一, 塚田 裕子
 [23 期] 堀田 照久, 安田有希子 [24 期] 安藤 生大, 小林 健太
 [25 期] 荒木 康彦, 松田 達生, 三浦 玲子 [26 期] 梅田 朝美, 山上 順民, 頼 雨新
 [27 期] 石井 明仁, 田島 丈年, 三輪真一郎 [28 期] 中村 一夫, 野口 眞弓, 山本 浩万
 [29 期] 島田 耕史, 高橋 一晴 [30 期] 小林 靖広, 曹 奎煥
 [31 期] 浅井 志保, 安藤 康行, 太田 雅仁 [32 期] 水野 崇, 榊川 直
 [33 期] 馬場 恵里, 細見 幸信 [34 期] 向 充美, 吉岡 伸浩
 [35 期] 今村 恭子, 井上 恭豪 [36 期] 大泉 満彦, 田中 智史
 [37 期] 加納 大道, 坂 秀憲 [38 期] 上村 哲哉, 清家 一馬
 [39 期] 安原 健雄, 菅原 拓夫 [40 期] 角田 勝, 岡崎 一浩

運営委員

- [総 務] 篠田 晋治 (1 期), 木村 純 (2 期), 原 雄 (3 期), 川島 眞一 (3 期)
 [総 会] 井岡 大和 (3 期), 塩澤勝太郎 (10 期), 林 政彦 (12 期), 田島 丈年 (27 期)
 [名 簿] 松村 春彦 (14 期), 米持 賢治 (教職員・15 期)
 [会 報] 宮下 敦 (15 期), 井出 裕介 (34 期)

稲門地学会

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1

早稲田大学 教育・総合科学学術院 地球科学教室内

TEL: 03-3208-8473 FAX: 03-3207-4950

http://www.dept.edu.waseda.ac.jp/earth/index_j.html

e-mail : earth@edu.waseda.ac.jp

編集代表 : 井出 裕介 (教職員・34期)

編 集 : 宮下 敦 (15期)

題 字 : 大杉 徹 (名誉教授)